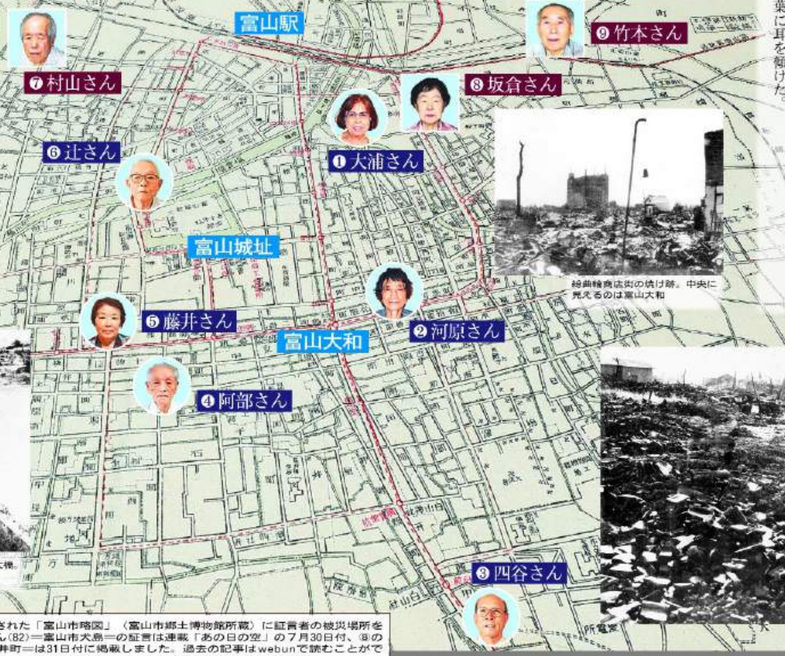
惨禍 今もまぶたに

あの日の空 とやま戦後70年

富山大空襲 被災者の記憶地図

1945（昭和20）年8月2日未明の富山大空襲は、一夜にして3千人近い死者を出した。市街地の99%以上が焼失。被害を受けた地域と現在の地図を重ね合わせると、人口密集地を狙った作戦だったことがよく分かる。あの日、あの夜に、何があったのか。空襲に遭った人たちの言葉に耳を傾けた。

空襲で焼け落ちた神通大橋。対岸は五福地区



地図の見方

1940（昭和15）年に作成された「富山市略図」（富山市郷土博物館所蔵）に証言者の被災場所を示しました。⑦の村山野さん(82)＝富山市大島＝の証言は連載「あの日の空」の7月30日付、⑧の坂倉ナミさん(87)＝同市田井町＝は31日付に掲載しました。過去の記事はwebunで読むことができます。⑨の竹本広さん(88)＝同市宝町＝の体験は、きょうの社会面連載にあります。

市街地破壊率99・5%

富山市は本土空襲の中でも甚大な被害を受けた都市として知られる。

1970年に米国の機密指定が解除され、国立国会図書館が81年に入手した米軍の作戦任務報告書には、市街地の1・88平方キロのうち破壊した面積は1・87平方キロ。破壊率は99・5%とある。比率は被災都市で最悪の数字だ。報告書には被害状況を書き込んだ富山市中心部の空撮写真も添えられている。

作戦任務報告書（英文）は国立国会図書館デジタルコレクションで自由に閲覧できる。インターネットの検索サイトで「富山大空襲」と入力すると、報告書の内容を解説した当紙の連載「あの日の空」の一覧が出てくる。

B29と富山大空襲の歴史

1939年9月	ドイツ軍がポーランドに侵攻し、英仏に宣戦布告
11月	米がB29開発に着手
1941年12月8日	日米が開戦
1942年4月18日	米軍が日本本土初空襲。空母からノースアメリカンB25が東京や神奈川など爆撃
6月5～7日	ミッドウェー海戦
1944年1月	B29完成
6月15日	米軍がマリアナ諸島のサイパン上陸
16日	中国四川省を発進したB29が北九州の八幡製鉄所など空襲。B29による初の空襲
7月9日	サイパン陥落
10月12日	サイパンにB29移駐開始
11月24日	マリアナ基地から日本本土初空襲
1945年3月10日	東京大空襲
26日	米軍が硫黄島を占領し、本土空襲の中継点にする
5月25日	伏木港に機雷投下（以後7月25日までほぼ8回）
6月16日	新潟空襲。26人死亡
17～18日	鹿児島・大牟田・浜松・四日市が空襲で被災。以降は複数都市を同時爆撃
7月16日	新潟空襲。20人死亡
20日	富山市内3カ所に焼夷弾爆投下
26日	富山市豊田地区に焼夷弾爆投下。米英中が日本に降伏を勧告する「ポツダム宣言」発表
7月31日	富山市に警告ビラ散布
8月1～2日	富山・長岡・八王子・水戸が空襲で被災
6日	広島に原爆投下
9日	長崎に原爆投下
14日	ポツダム宣言受諾決定
15日	終戦

8月1日・8月2日 ドキュメント富山大空襲

8月1日

- 17:30 富山市を目標とする米第73航空団の先導機などがサイパン離陸
- 17:40ごろ 本隊離陸開始
- 20:40ごろ 長岡市に向かう第313航空団が三重上空に近づき、警戒警報発令
- 21:50ごろ 空襲警報発令
- 23:00近く 第313航空団が通過したため、警報解除

8月2日

- 0:15ごろ 第73航空団が県内に向かっていることを受け、再度の空襲警報
- 0:30ごろ 第73航空団の先導機が富山市に接近
- 0:36 焼夷弾投下開始
- 2:27 焼夷弾投下終了
- 8:00 知事や富山市長らが現庁で対応を協議

① 大浦 貞子さん(84)

魚津市吉島

自宅跡に焼夷弾痕

空襲の日は松川のそばにあった自宅にいた。至る所で火の手が上がり防空壕に逃げ込んだが危険で、母の位牌をリュックに入れ、姉と集団方面へ逃げた。焼夷弾が雨のように降ってきた。「ザー」という音は今も耳に残っている。川岸の電柱が火を噴いて倒れ、火の粉をかぶった。バケツで消火を何十杯もかぶり、焼け死ぬのを免れた。自宅があった跡には焼夷弾の穴が37個もあった。

戦争がいかに多くの命や財産を奪うのかを知ってほしい。食べる物も、身の回りの物もなくなっていく。天災とは違い、戦争は人が起こすもの。繰り返してはならない。

② 河原 照子さん(88)

富山市泉町

母の手を取り走る

当時、常盤町に住んでいた。真っ暗闇の自宅で、両親と3人の弟と空襲警報を聞いた。市内に落ちた焼夷弾で、外は昼のように明るくなった。職場の仲間同士では、空襲時は消火を担当する市街地の空に、雨のように落ちる青白い焼夷弾が見えた。

自宅はそばにあった松川を越すことは許されていた。戦争すべての青春を過ごし、アルバムや思い出は残っていない。苦しい時代を生きたが、70年間戦争がなかったことは本当に良かった。

③ 四谷 善造さん(84)

富山市西中野本町

人生で一番つらい

西中野町（現西中野本町）の自宅にいた。富山駅周辺にB29が低く飛んでいるのが見えた。炎で空が明るくなったが、自宅の家は燃えるものがないと高をくくっていた。

隣家が燃え、家にも焼夷弾が落ち、よろめく避難を始めた。防空頭巾をかぶり、水の入ったバケツを持って、土足で屋敷を通り抜けていった逃げていると、父には逃げろ」とかられた。今力で走った。川にも飛び込んだ。無我夢中だったので、どんな光景だったか覚えていない。

人生で一番つらい思いをした。戦争をすれば、互いの国の人や財産は無くなる。二度と起こしてほしくない。

④ 阿部 重二さん(87)

富山市西大泉

火の海の中逃げた

「富山の皆さん、しっかり帰ってください。」西四十物町の自宅で、B29襲来を知らせるラジオがこう告げると同時に、隣の照根に焼夷弾が落ちた。消火しようとしたが、気付くと上半身に火がついていた。母の手を引いて天の海の中を逃げた。なんとか機関部町の土手に着き、川に浸かった。目の前の人が焼夷弾の直撃を受け、焼きれて行くのを見えた。

地面が熱く、家の焼け跡を見に行けたのは翌日。街は死体だらけで、若い母親が赤ん坊に覆いかぶさり黒焦げになっていた。いま思うと地獄だった。こんな悲惨なことは二度と起こってはならない。

⑤ 藤井 悦子さん(78)

富山市旅籠町

恐ろしく声も出ず

当時は現在と同じ旅籠町に住んでいた。空襲のあった夜は二口（現・富山市二口町）に疎開していて、空襲の時も避難していたが、パニックになった軍用機たちが燃える町に向かって来ていくのを見た。2日ほど後に自宅近くに行くと、自分よりも幼い子どもや、母子で亡くなった死体を目にし、恐ろしさで声も出ず、体がこわばった。焼け残った蔵が爆発する音も聞こえてきた。

空襲は焼夷弾（焼夷弾）を落とし人たちも、普通の精神状態ではなかったではないか。戦争を二度と起こさないためには、個者を思いやり、自分を律するほかない。

救助できず後悔

⑥ 辻 政次さん(89)

高岡市横田本町

明けがた中間引き上げられ、救護所の神田中（現・富山中部高）で手当てを受けた。着衣は焼け焦げ、目もやられていた。50人の半数が絶死した。助けを求める多くの人の姿はいまも脳裏にある。当時は任務優先、助けられず、いまでも悔やみきれない。

いまの富山大の場所にあった歩兵第514連隊の営舎地に集合し、事服に着替えて命令を待った。富山城内の司令部へ整列に向かえ」と連隊長。

50人で急行した。司令部は爆撃の標的で、焼夷弾が降り注いだ。熱さに耐えきれず、松川に飛び込んだ。水はぬるく、多くの遺体が流れていた。

次回の「あの日の空」の特集は15日の予定です。終戦を告げた昭和天皇による「玉音放送」にまつわる思い出を募集します。皆さんはどこで聞き、どう思いましたか。宛先は〒930―0094 富山市安住町2の14 北日本新聞社編集局「戦後70年」係。ファクスは、076(431)2110。メールはsango70@mail.kitanippon.co.jp。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。

参考文献

『ルメイ・最後の空襲』（中山伊佐男著）
『中小都市空襲』（奥住喜重著）
『米軍が記録した日本空襲』（平塚柾緒編著）
『富山市史』（富山市）
『富山戦災復興誌』（富山市）
『新瀦市史』（新瀦市）
『富山県史』（富山県）
『富山大空襲』（北日本新聞社編）
『とやま戦後叢書』（北日本新聞社編）
『私の戦争体験記』（北日本新聞社編）